

八木：ありがとうございます。三田先生と張先生のお話を伺いました。今この段階で、休憩に入る前に両先生にお尋ねしたいことがありましたらどうぞ、壇上の方もフロアの方も手を上げてください。いかがですか？

私自身も、今張先生のお話を聞きますと、意識形態に幾つかのレベルがあり、経済的な意識形態は下のレベルで現実に近いんだということの議論、これは河上肇の「いわゆる意識形態について」という論文を思い出します。また王亜南先生が「中国経済学」というふうに言われたのも、これも京都では戦前期に「日本経済学」ということがいわれたので、おもしろいと思います。私も中国に行った時に、中国経済学というのがこれから生まれるんだという話を聞きました。こういうことも後で議論をしてみたいと思います。よろしいですか、みなさん…あるいは壇上の方……。それではただいまより 10 分間休憩とします。

(休憩)

八木：では本学の 3 教授にご意見をいただきます。初めに大西教授、次に山本教授、そして最後に本山教授の順にご発言いただいて、その後討論ということにいたします。それでは大西教授、よろしくお願いします。

大西：経済学部の大西です。お手元のレジュメ集の中に「現代中国のマルクス経済学と河上肇」という私の 1 枚ものの簡単なレジュメがございます。ⅠとⅡと順番でやろうと思ったのですが、話の流れで逆にします。というのは、先ほど河上肇の影響というものを三田さんからお話いただきまして、それから張小金さんから王亜南の話がありました。その構造をまず私のほうから、おさらい風に話します。そのためにまず、レジュメ集の中の「当代中国著名マルクス経済学者簡譜」を見てください。これは私が作ったもので、現在中国でマルクス経済学の影響力を大変強くもっている研究機関というのが何種類かございます。もちろん程度によるわけですが、その中でとりわけ有名なものに、中国人民大学、復旦大学、そして南開大学、厦門大学、そして「付録」として書いた中国社会科学院という研究機関があります。その中で、中国人民大学のところを見ていただければと思うのですが、宋濤先生というお名前が冒頭にありまして、その括弧の中に、河上の弟子で中央党校の設立者となった王学文の弟子となっております。つまり、王学文さんという方が河上の弟子であります。そして、その弟子が宋濤さんということであります。

今 4 つの大学を並べ、さらに中国社会科学院を述べましたけれども、この中国人民大学は、実はその中でもとりわけ特別に中国マルクス経済学で高い地位を有しております。中国のマルクス経済学の主要な学会に「中国資本論研究会」というのがございまして、私も最近は大いに常連で参加させていただいていますが、そこは中国人民大学を中心に動いております。前会長、現会長、副会長という者をずっと人民大学から出してございまして、特別

な地位を占めているのが中国人民大学です。我々の大学の経済学部とも交流協定をもっていろいろやっております。

それから2番目の復旦大学、この冒頭にあります漆琪生というのは暨南大学という大学を経て後に復旦大学に移動されていますが、この漆琪生さんという先生は三田さんのご本によると京大経済学部在籍されています。河上の辞職と入れ替わりに入学ということになっていますが、「河上の講義を聞いた」と『中国留学生大辞典』にはなっている人です。大学での「授業」という形では受講できていないと思われますが、河上の影響を強く受けていることは私自身も復旦大学関係者から直接お聞きしました（シンポジウムでは「漆樹芬と同一人物」と述べましたが、上記内容が正確です）。その方が復旦大学でマルクス経済学の原論を普及して行き、その延長上に縷々流れる流れがあったわけです。なお、この3人目の洪遠朋先生のお弟子さんの程恩富さんという方が上海財経大学に移動しております、若干この流れの中心が復旦大学から上海財経大学に移動しておりますが、大きくはこの流れということになっております。

それから南開大学にもおられます。ここは直接には河上との関係を発見することは、私の調査の段階ではできておりません。そして、最後の厦門大学の戦後初代の校長が本日張先生にご紹介いただいた王亜南ということになっていまして、河上とある接点を持っているということになっています。この王亜南は先ほどの説明でもありましたように、経済学者でもあり哲学者でもありますので、お弟子さんの中には、哲学系の方と経済学系の方がともにおられますが、その哲学系の流れを引き継いでおられる現在の厦門大学の教授が張小金先生でおられると、こういう感じになっているわけです。こうして、現在中国においてマルクス経済学の中心を担う4大学の流れのうちの3つまでが、河上の流れを背負っているということになります。

それで、話を私のレジュメの上半分に書いた中国マルクス経済学の現状についての紹介に進ませていただきます。が、その前にここで少し私の中国との関わりを紹介させていただきたいと思います。と申しますのは、実は私の両親は1953年まで中国で留用されています。当時、だいたい中国東北地方で終戦直後に帰れなかった技術者の多くはそうであったのですが、軍隊に参加・協力させられることになりました。これは強制的にさせられたのか、自分から進んでやったのか区別がほとんどつかないような参加・協力であったわけですが、当時「民主連軍」と呼ばれた共産党軍の一部に参加しています。その当時のことは両親から何度も聞かされていまして、私の中国への関心、特にそのマルクス経済学への関心はここに始まっています。

そして、現在、中国の多くの学界との接点を持っていますが、私は本来統計学者でもありますので、まずは社会統計学の流れが行っている日中経済統計学シンポジウムと数理統計学の流れが行っている日中統計学シンポジウムの組織委員をここ10年ほど継続的にやって来しました。前者は2年に一度の日中交互でのシンポジウム、後者は3年に一度のものです。が、去年は両者が合体して桂林で会議が開催されました。

ところで、本日のシンポジウムは中国のマルクス経済学に関するものですから、この統計学におきましても、マルクス経済学と関わりの大きい「社会統計学」の学派の現状を紹介したいのですが、全体的にいつて最近は数理統計学に抑され気味で、これが全体的な状況です。ただ、それでも、そう簡単には言えない面もありまして、日本の社会統計学者よりは、案外と数理統計的手法を導入して頑張っているとも言えます。ポリシーメイキングに関わって仕事をされておられる研究者などは数量モデルを作って、政策分析を行っておられ、私などはそういう方に大変親近感をもっています。

一方、マルクス経済学の領域でも、私として大きな接点をもつ機会がありました。八木先生などとも同じ学会なのですが、日本のマルクス経済学会を代表する経済理論学会という学会で国際交流委員というものを3年ほど行いました。この国際交流委員会はアメリカとの交流を担う委員とヨーロッパとの交流を担う委員とアジアとの交流を担う委員によって成り立ってしまして、私はそのアジアとの交流の委員をしていたわけです。先ほど申しました中国の資本論研究会に参加したり、またこちらからご招待したりということをしばらく行いまして、この関連の中国の学会に3回ぐらい参加させていただきました。

それで、本題の中国マルクス経済学の現状についてですが、何をもって非主流派というかは難しいのですが、やはり非主流派に転落していると全体的には評価できます。これは、やはり政策科学、ポリシーメイキングという点で、河上肇を含めてマルクス経済学がポリシーメイキングをあまり考えて来なかったということがあり、それが近代経済学・西側経済学に対してディスアドバンテージとなったということを否定することはできないわけです。

今、マクロコントロールも含めて、中国がそういうことをやらなければならない段階に入っていますから、このディスアドバンテージは障害として大変大きなものになっています。が、実は、これはマルクス経済学の考え方自身でもあるわけですが、経済学というものは社会構造上何のために存在しているのかという問題を立てれば、そういった政策形成上の役割とともに、政策として政府が行っていることをジャスティファイするという役割があります。例えば、民営化を推進しようとするれば、それに適合する学派がありまして、それを人々が信じるようになれば民営化はいいものだととなりますね。こういう作用を我々、イデオロギーの現実正当化作用と言いますが、それは中国においてはマルクス経済学しかできないわけで、その役割を大きく担っています。つまり、中国は「社会主義」ですので、近代経済学でこれは良いことだと言ってもそれでは正当化したことにならないので、やはりマルクス経済学がその用語を使って正当化しなければなりません。例えば、この間、中国では私企業家が共産党への入党が許されることになりましたが、それが良いとか悪いとかいう問題はマルクス経済学でしか議論することはできないわけです。この意味では、中国マルクス経済学がそうした論争課題の議論の中心にどんと座っており、大変真剣な議論を、場合によっては掴み合いといっても良いような激しい議論をやっております。私も直接目撃しております。この意味で沈滞しているというわけではありません。

ただし、こうした「政策正当化」という以外にもマルクス経済学には大きな領域がありまして、それはやはり、特に江沢民政権までの馬車馬のような市場資本主義化が引き起こした諸問題の告発という分野での諸論争です。私は中国をその毛沢東時代からすでに国家型の資本主義であったというふうに理解しておりますので、資本主義は昔からあったのですが、とにかく今のタイプの資本主義に馬車馬のように走的过程中で多くの諸問題が噴出して来ています。ので、そのやりすぎというものに対する批判が中国のマルクス経済学会では大きなテーマとして掲げられています。

例えば、一昨年の暮れぐらいから、国有資産の流出問題というものがひとつの大きな問題になりました。民営化される過程で、本来なら国有資産であるものが企業幹部やそれにつながる人物が自分のものにしてしまうという問題です。「官金私消」という言葉が以前ありましたが、ともかくこの問題を香港の郎咸平さんという教授が問題にしまして、香港の近代経済学者も問題にしているのだから、これは問題だというふうに飛びついて相当大きな論争になりました。

或いは、ちょっと別の話なのですが、そういう状況の中で先に少し言及しました上海財経大学の程恩富教授を中国共産党中央政治局が招待をして経済学のレクチャーを聞くということがありました。これは江沢民政権当時にも、また胡錦濤政権になってからの二度あったことですが、江沢民総書記ないし胡錦濤総書記が司会をする理論座談会での報告ないし講義を教授が担当したのですが、経済学者が中央政治局で講義をするというのは未曾有のこととして学界では大変大きな話題になりました。党中央も彼らマルクス経済学者を非常に重要な研究者群であると認知するようになったということです。

あと、マイナーな状況紹介でござりますが、中国マルクス経済学の多くの本や論文を読むなかで発見したおもしろい現象をいくつか紹介します。

その1つは、中国のマルクス経済学というのは日本より案外数学をやっているということです。たとえば、「数学の論文であれば、翻訳して雑誌に載せられる」というふうに私は先方からオファーを受けていて、ある時は、送った論文が「これは数学の部分が少ない」とリジェクトされ、またある時はそういう論文として掲載を許可されました。マルクス経済を数学化する道を最大限探求したいという姿勢が垣間見られます。

また、マルクス経済学の中にミクロ経済学やマクロ経済学があるというのも大変面白い現象です。ここにそうしたマクロ経済学とミクロ経済学の教科書を見本としてお持ちしましたが、またこういうのは日本では考えられないことですね。

さらに、日本で存在するマルクス経済学内のさまざまな学派が、たぶん自然的ではないかと思われるのですが、中国でも出てきていることです。

例えば、ここにあるのは「資本論の基本思想と理論ロジック」という本ですが、日本のマルクス経済学の用語でいうと、論理=歴史説というものですね。資本論の中の論理構造は歴史の流れと同じだという見方ですが、そういう見方が日本の論理・歴史説とはたぶん独立にいつの間にか出現しています。また、先ほど紹介されました、見田石介先生の資本論

解釈を私は日本の正統的解釈だと思っていますが、その流れでいくつかご研究をされています張小金先生以外にも似た傾向の本を先日発見しました。つまり、資本論を正・反・合という弁証法的論理体系の書として理解しなければならないという書物です。

あるいは、さらに、これは手元に日本語訳のものしかお持ちできませんでしたが、天津の研究者群が日本の学界では「労働の社会化論」といわれるのとはほぼ同じ趣向の書物を出しています。資本主義の発展というものを、孤立した個々の労働の社会的な労働への変化を中心に理解する流れで、さまざまな部面での労働の社会化に注目して現代資本主義を分析し、その新しい側面を中国に取り入れようと政策提言を行っています。なお、これら以外にも、「市民社会派」、「人間発達論」などといった趣向のものも存在しますが、ここでは省略します。

ともかく、「マルクス経済学」である以上、原本にしているテキストブックは『資本論』ですから、当たり前といえば当たり前なのですが、よく似た理解のいくつかの考えがこのように出てきているようです。ですので、そういうことからすれば、日中のマルクス経済学は同種の学派の間での交流でもよいし、あるいはもっと広い交流でもいいのですが、交流によってお互いに発展することができるように思われます。

以上です、どうも御清聴ありがとうございました。

当代中国著名マルクス経済学者簡譜
(下線は大西の知人ないし直接お会いした方)

1、 中国人民大学

宋濤 (1913-, 中国人民大学初代経済系主任)

(河上の弟子で中央党校の設立者となった王学文の弟子)



衛興華, (1925-, 資本論研究会名誉顧問)



林崗 (1952-, 中国人民大学副校長, 資本論研究会会長)



張宇 (1964-, 中国人民大学経済学院主任, 資本論研究会副会長)

2、 復旦大学 (上海財經大学)

漆琪生(暨南大学→復旦大学)



蒋学模(1918-), 張薰華(資本論研究会名誉顧問)



洪遠朋(1935-, 元復旦大学経済学院院长、資本論研究会副会長)



程恩富(上海財經大学)、陸德明(復旦大学)

3, 南開大学

谷書堂(1925-); 魏埏(1919-2004、Sraffa 研究)



朱光華(1937-)、張忠任(島根県立大学)



柳欣

4, 厦門大学

王亜南(1901-1965, 厦門大学戦後首任校長)



胡培兆(経済系); 吳宣恭(経済系、現中国経済問題研究所)、鄭道传(経済系→哲学系、元々統計学)

(1937-)

(1930-)



張興国(経済学院、社会統計学)



張小金(1948-, 哲学系)

附录 1

中国社会科学院:

孫冶方(1908-1983)(「孫冶方経済学賞」=中国のノーベル賞、人民大学で講義??)

張卓元（1933-），元社会科学院經濟研究所所長。

王振中（1949-），社科院經濟研究所副所長，資本論研究会副会長。

錢 津（1951-），資本論研究会副秘書長

左大培，新左派經濟学者（西方經濟理論研究室）

八木：ありがとうございました。大西教授からは、特に中国の中でのマルクス経済学は現在どういう状況なのかということをご説明いただきました。それでは今度はつながるようなかたちになるのではないかと思います、山本教授にお願いいたします。

山本：山本でございます。中国の政治経済学ということで報告させていただきます。私自身は中国経済を専門にしております、方法論的には開発経済学あるいは経済発展論とよばれる、いわゆる近代経済学の一部門をデシプリンとしています。従いまして、なぜ私がこの場にいるのかというのは、多少私自身違和感があるわけですが、もちろん私の世代は、やはり経済学といえば経済原論でもマルクス経済学と近代経済学が並立する時代でございます、もちろん私自身も友達と『資本論』を一緒に読んだり、あるいは『資本論』の講義を受けたりしたこともあります。しかし現在は近代経済学の立場に立って、中国の経済、特に農業問題を研究している者です。

今日ご報告したい点は、どれだけ話せるか時間の関係もあって分からないですが、3つほど申し上げたいと思います。

まず、私自身そういう立場にありますので、どちらかといいますと中国の近代経済学の導入史とかそういうところに非常に興味がありまして、まずⅡにあげました「近代経済学とマルクス経済学」ということですが、その1で「北京大学教授達の経済科学工作に関する意見書」というものに関してご報告したいと思います。これは、もっと正確に言いますと、その下に書いてありますように、「当面の経済科学工作に関する我々の幾つかの意見」ということで、この意見が載っている本がそこに書いてありますように、資産階級社会科学復壁に反対するという本が1958年に出ておりまして、50年代、いわゆる中国は49年に毛沢東が中心になって新中国を建設するわけですが、そのあと世界に散らばっている、特に欧米、日本で学んでいる大学、大学院、あるいは大学のスタッフ、そういう知識人を中国に帰国させて中国の建設に当たらせようということで、そういう大運動を展開したわけですが、ここに挙げます陳振漢とか以下6名の人のうち3名の人が陳振漢教授初め北京大学の教授でありまして、あと3人のうち政府部門が谷氏と寧氏という人、それから巫宝三は当時中国科学院の経済研究所の研究員でありました。

この意見書はそこに書いてありますように、いろんなことが書かれてあるわけで、先ほ